

「見よう」  
ハバクク書 2 : 1 - 4

神田明美

## ○導入

皆さん、おはようございます。2023年も皆さんと共に神様に礼拝を献げられる恵みを心から感謝します。今年のキャンドルサービス、クリスマス礼拝に続き、松原湖バイブルキャンプの外部奉仕があり、あっという間に年が明けたと思ったらもう1月が終わろうとしていることにびっくりしています。本当に時の流れが年々早くなっていき、昨年を振り返る時間、余韻に浸る時間が全然足りないと思ってしまうのですが、皆さんは昨年の振り返りはできましたでしょうか？

時間は足りないながらも、自分の昨年1年を振り返って確かなことは、先が見えず心配や恐れ、不安を抱えつつの歩みではあったけど、確かに神様は守り導いてくださった。だからこのように新たな1年を迎えることができているということです。しかし、それと同時に、今年を今日まで過ごしてみて、それにもかかわらず、またこれからのことで思い悩んでいる自分がちらついて仕方ありませんでした。

私たちクリスチャンの歩みは、喜びで溢れる時ももちろんありますが、ヨブのように、時に全く理解できないような、受け入れ難い苦難や試練に置かれる時があります。そんな時、私たちは「えっ？神様これは一体なんですか！？どういうことですか？どうしてですか？なぜ、このことが中々解決へと導かれないのでしょうか？」と神様に尋ねずにはいられなくなります。そして、質問は、自分のことだけでなく、終わりの見えないコロナやロシアとウクライナの戦争など世界のことに及ぶのではないのでしょうか。

神様のみこころってなんだろう？これからどのように歩んでいったらいいのだろうか？これからどうなっていくのだろうか？この苦難や試練とどう向き合ったら良いのだろうか？どのような選択と決断をしたら良いのだろうか？神様はなぜ私の祈りに答えてくださらないのか？等々のたくさんの問いが次々に浮かんでくるなか、私たちはどのように生きていったら良いのでしょうか？

先週の洪先生のメッセージの中で、「神との格闘」は英語の聖書では「神とレスリングする」と訳されているとありました。昨年の12月からずっと頭から離れず、今年の私個人のテーマ聖句となったハバクク書2章1-4節のみことば、神様とレスリングをした人の1人、預言者ハバククの箇所を通して共に見つけていけたらと思います。

では、今日の聖書箇所をお読みします。旧約聖書**ハバクク書 2：1－4**のみことばです。聖書をお持ちでない方はスクリーンをどうぞご覧ください。では、お読みします。

#### ハバクク書 2：1－4

- 1 私は、自分の物見のやぐらに立ち、砦にしかと立って見張り、  
私の訴えについて、主が私に何を語られるか、私がそれにどう応じるべきかを見よう。
- 2 主は私に答えられた。「幻を板の上に書き記して、確認せよ。これを読む者が急使として走るために。」
- 3 この幻は、定めの時について証言し、終わりについて告げ、偽ってはいない。  
もし遅くなっても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。
- 4 見よ。彼の心はうぬぼれていて直ぐでない。  
しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」

#### ○ハバクク書について

ハバクク書は、他の預言書とは少し異なる点があります。一般的な預言書は神様からこう語りなさいと預かった言葉をイスラエルの民たちに述べ伝える形に対して、ハバクク書は、預言者ハバククから神様への質問・訴えがあり、それに神様が答えるという、対話の形。

預言者からイスラエルの民たちに神様の言葉を語るというよりも、彼らが抱え悩み葛藤している問題を神様の御前に、自分のことのように持って行って尋ね求めるのがハバクク書の特徴です。皆さんも、1章から読んでいって、ハバククの神様への投げかけの内容が、この当時だけでなく、今の時代にあっても私たちが神様に投げかける内容だと思われるのではないのでしょうか。では、ハバククのこの神様への質問・訴えはどのような状況から出てきたのかを振り返ってみたいと思います。

#### ○ハバククが置かれた状況

ハバククは南ユダの最後の時代に活躍した預言者です。この時、南ユダは国の存続が危機的状況に陥ってしまいます。そのきっかけとなったのが、南ユダのヨシヤ王の死です。ヨシヤ王が王になってから行ったことがⅡ列王記 2 2章から 2 3章 2 9節まで描かれています。そして、彼の評価は、Ⅱ列王記 2 3：2 5に「ヨシヤのようにモーセのすべての律法に従って、心のすべて、たましいのすべて、力のすべてをもって主に立ち返った王は、彼より前にはいなかった。彼の後にも彼のような者は、一人も起こらなかった。」と書かれるほど、神様の言葉、みことばを大切にし、従い、あらゆる偶像をとっばらい、礼拝を回復させた、主の目にかなった、神から見ても、人から見ても最高の王でした。

しかし、ヨシヤ王はアッシリアとバビロンの戦いで、アッシリアの援軍を連れてのぼってきたエジプトに戦いを挑んでしまい、戦死してしまうんです。民たちは自分たちの王、主の目にかなっていた王を失ってしまいます。でも自分たちの国を納める王がない期間

をつくるわけにはいきません。なので急いで次の王を立てるのですが、それがヨシヤ王の4番目の息子エホヤハズでした。が…エジプト側が彼を気に入らず、なんと彼を幽閉して、ヨシヤ王の2番目の息子エホヤキムを王に立ててしまうんです。そして、彼は父ヨシヤ王のようにではなく、主の目に悪であることを行ない、父とは真逆の道を進んでいってしまうんです。

それはどれほどかという、エレミヤ書36章を見ると、エレミヤがそれまで語って来た23年間分の預言を書記のバルクという人に書き留めさせ、巻き物として完成させるんですが、その翌年の冬、バルクが神殿でエホヤキム王にその語られた預言書を読んで聞かせたら、みことばを大切に、従った父ヨシヤに対し、なんと、息子エホヤキム王はその巻き物を少しずつ切り取っては火で燃やしてしまうんですね。

ハバクク書1章1-4節で、ハバククが神様に「こんなに切実に助けを叫び求めているのに、聞いてくださらず、救ってくださらないこの苦しい状況は一体いつまでですか？なぜ義なる神様がこの状況に介入せず、ただ見守っているだけなんですか？」と訴えかけるきっかけは、このエホヤキムが国を治めていた時代の、自分たちの目に見える、不義が義に、悪が正義にまさっていく状況によってでした。

ハバククは神様に問います。なぜあなたの目にかなっていた王を死なせ、こんな最悪な王たちを立てるのですかと。南ユダが、あなたの選びの民たちがこんな状態でいいのですか。このままでは滅んでしまいますよと。

#### ○神様の応答とそれに対するハバククの反応

そんなハバククに神様は答えてくださいます。1章の5節以降ですね。しかし…その答えは、ハバククが期待していた、聞いたかった、理想としていた答え、「よし、分かった。すぐに私がまたヨシヤ王のような王を立て、国から不義を取り除き、裁きが正しく行われるように、悪き者が正しい者に勝ることがないようにしよう。」というようなものではありませんでした。むしろ、神を知らず、強暴で名高いバビロンを通して南ユダの悪を裁くという、まったく理解できず、聞きたくはなかった、思わず耳を疑う答えでした。そして、ハバククはさらに神様に問うんですね。「諸国の民を容赦なく殺すのですか」「本当にそれがあなたのみこころ、正しいベストな選択なのではないでしょうか」と。

ますます苦しい状況に置かれたハバククはここである行動にでます。**ハバクク2章1節**をご覧ください。

**1 私は、自分の物見のやぐらに立ち、砦にしかと立って見張り、私の訴えについて、主が私に何を語られるか、私がそれにどう応じるべきかを見よう。**

もどかしい思い、理解できない思い、民たちの問題や神様への訴えを持って、ハバククは物見のやぐら、砦に立つんです。物見のやぐら、砦とは、皆さんもご存知のように、城の中で一番高いところ、城を守るために建てられる一番高い建物です。何もかもが見渡せる場所。見張り台のことです。敵の動向や敵の数がどれくらいかを把握したり、敵がどこからどのように攻めてくるのかをよく確かめる場所がまさに砦です。では、なぜハバククはそんなところへ行ったのでしょうか？一体何を見ようとしたのでしょうか？

○ハバククが見ようとしたもの

1節の後半にこのように書いてあります。「私の訴えについて、主が私に何を語られるか、私がそれにどう応じるべきかを見よう。」ハバククはここで、自分の訴えに対してどのように答えてくださるのか、神様がどのように働いてくださるのか見るために砦にのぼって、しっかり立って見ると宣言しています。敵を見るためではなく、神様を見るために、神様との時間をさらに持つためにのぼる所が砦だと言っています。

必死に訴えたにもかかわらず、それに対する答えはバビロンを用いてイスラエルの民たちを裁くという、最悪としか思えない内容。全く神様の言っていることが理解できない。

しかし、ハバククはここで信仰の歩みを諦めるようなことはしませんでした。諦めるどころか、さらに神様とのレスリングをしにいくんです。様々な思いや願い、問題を持って神様の所にさらに出ていくことを選び取るんです。そして、自分に与えられる神の言葉を一番に待とうとするわけです。

神様は、状況を変えるよりも、まずみことばを与えてくださる。そして、私たちを状況によってよりも、まずみことばによって導いてくださるというのが分かります。ノアの洪水の時も、アブラハムが自分の故郷を旅立つ時も、イサクを捧げようとした時もそうでした。

1節に「見張り」とありますが、イザヤ21：8を見ると「主よ。私は昼はいつも見張り場に立ち、夜ごとに自分の物見のやぐらについています。」と見張りの働きについて書かれています。砦での見張りのすべきことは、そこにしっかり立ち、昼夜問わずに注意してよく見ること。このような見張り番の思いで、神様が自分の訴えにどのように答えてくださるのか、待ち続け、見続け、立ち続けると決心し、ハバククは砦にのぼって立ちました。

私たちも、ハバククのこの姿勢に注目したいなと思うんです。まだ解決してない問題や思いを抱えた時、私たちがこのような態度を持って、昼も夜も神様が語ってくださる言葉、神様がなしてくださる御業に注目できるよう神様が導いてくださることを信じます。

## ○答えてくださる神様

では、次に砦に立ったハバククに神様がどのように答えてくださったかをみてみましょう。2章2節。2 主は私に答えられた。「幻を板の上に書き記して、確認せよ。これを読む者が急使として走るために。

伝えるべき幻の内容を、どのように書いたらいいのかをまず語られました。韓国語だと走りながらでも読めるように、リビングバイブルには、誰でもひと目で読んでほかの者にすぐ伝えることができると書かれていました。本当に読んだ者がすぐ次の人たちに伝えられるように。

そして、3節では。3 この幻は、定めの時について証言し、終わりについて告げ、偽ってはいない。もし遅くなっても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。と言われます。この3節には嬉しいこととチャレンジとなることの両方が言われています。嬉しいことは、3節で神様が「必ず来る。遅れることはない。」と約束してくださっていること。チャレンジとなるのは「もし遅くなっても、それを待て。」という言葉です。私たちが遅いと感じることがある。でも、遅れることはない。私たちの時ではなく、神様の時を待たなきゃいけないということです。

## ○どう待ったらいいのか？

では、私たちはどのように待ったら良いのでしょうか？4節をご覧ください。4 見よ。彼の心はうぬぼれていて直ぐでない。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」  
解けない問題を持って神様とレスリングしに出て行ったハバククに、神様は、そのことに対する解決策を語ってくださるのではなく、「正しい人はその信仰によって生きる」と言われました。

ここにある「信仰」という言葉はヘブル語で「エムナー」という言葉です。しっかり、耐える、頑丈、安全、誠実、信仰、地道、絶え間なく、真実、忠実などの意味がある言葉です。旧約聖書では、信仰と訳されている箇所は今日の箇所だけです。

このエムナーがほかのところでどのように出てくるかと言いますと、旧約聖書でエムナーが初めて出てくるのが、アマレクとイスラエルが戦う、モーセが両手を挙げると自分対tが優勢に、両手が下がると敵が優勢になるという箇所が出てきます。出エジ17：12です。

出エジ17：12「モーセの手が重くなると、彼らは石を取り、それをモーセの足もとに置いた。モーセはその上に腰掛け、アロンとフルは、一人はこちらから、一人はあちらから、モーセの手を支えた。それで彼の両手は日が沈むまで、しっかり上げられていた。」

ここで「上げられていた」という所がエムナーです。皆さん、両手をずっとあげていたことがありますか？私は小さい頃親に、妹と喧嘩して怒られた時など、良く正座して両手上げて反省しなさいと怒られ、両手を上げ続けていたことがあります。でもすぐに両手が疲れてきて、だんだんと下がってくるんです。でもこの箇所では、手が下がってくるのをなんとしても耐え忍んでいるモーセの姿、時には両手を支えてもらいながらも耐え忍ぶ姿にエムナーが使われています。つまり、ハバクク2：4は、正しい人は、誠実に耐え忍ぶことによって生きると言い換えられるのではないのでしょうか。

またこの言葉は、仕事が定められる場面でもこの言葉は用いられています。I歴代誌9：22「入り口にいる門衛として選ばれたこれらの人たちは、合わせて二百十二人であった。彼らはそれぞれの村で系図に記載された。ダビデと予見者サムエルが、彼らの忠実さに基づいて、この職務を定めたのである。」ここでの「定めた」がエムナーです。また続くI歴代誌9：31「レビ人の一人、コラ人シャルムの長男とマティテヤは、平たい菓子を作る務めを任された。」の「任された」もそうです。この人たちは一生涯この働きをしなきゃいけない人たちです。つまり、自分に与えられた働きが例え小さな働きだとしても誠実に耐え忍び行っていく。それがエムナーだと、今日の箇所で信仰と訳されている言葉と同じ言葉が用いられています。

また、II列王記12：15。「また、工事する者に支払うように金を渡した人々が精算を求められることはなかった。彼らが忠実に働いていたからである。」ここでは「忠実に」の部分がそうです。人が見ている時もそうでない時も、変わらず自分の働きに誠実で忠実であることとして使われています。

そして、このエムナーの一番のお手本を示してくださったのが、私たちのために誠実に真実に耐え忍び十字架に掛かってくださったイエス・キリストです。「どうか、この杯をわたしから取りさってください。」(マルコ14：36)とゲッセマネで祈られたほどのイエス様。でも、人たちがあざけっても、つばを吐きかけても、罪人たちの無知と暴力にも、イエス様は最後まで十字架の上で耐え忍ばれました。そして、このことを通して、私たちは罪赦され、滅びから救われ、永遠の命が与えられ救いが成就したわけです。なので、「正しい人はその信仰によって生きる」とは、「正しい人はイエス・キリストによって生きる」です。

今日の箇所は私たちにそれぞれの砦に登ってしっかり立ち、神様の言葉を待つこと。神様を見続けること。神様とレスリングすること。そして、イエス・キリストによって与えられた使命、働き、歩みを、誠実に耐え忍んで行いつつ待つというチャレンジを与えています。そして「必ず来る。遅れることはない。」と神様の約束の絶対さ、神様の時は早すぎることも遅すぎることもない。だから大丈夫と私たちを励ましてくれています。

何よりもの感謝は、私たちがエムナーするとき、1人ではないということです。めぐみ教会というたくさんの神の家族が、信仰の友がいますし、「見よ。わたしは世の終わりで、いつもあなたがたとともにいます。」と約束してくださったイエス様が共におられます。「私は、自分の物見のやぐらに立ち、砦にしかと立って見張り、私の訴えについて、主が私に何を語られるか、私がそれにどう応じるべきかを見よう。」この2023年も与えられている特権をフルに活用し、神様とレスリングしていきましょう。

お祈ります。